

第六章 『婦人之友』誌における送り手と受け手の関係性

前章において、予め設定した時代ごとの誌面の変化の様子を、内容の量的・質的分析によって把握してきた。その結果、誌面の変遷の特徴として、おおまかに、①羽仁もと子の先導力を反映している、②戦争直前の戦争に関することと、『友の会』による環境や不条理に関する活動は記事になりやすい、③羽仁もと子は誌面編集に大きな影響力を持つ、ということがわかった。

そこで本章では、上記の3点の変遷に着目しながら、時代背景や、『婦人之友』誌とともに、他の文献とヒヤリング調査の結果も交えて、さらに考察をすすめていく。

6-1 友の会以前（1903年-1926年）

6-1-1 時代背景

『家庭之友』が創刊されたのは1903（明治36）年である。さかのぼって1895（明治28）年の高等女学校規定と1908（明治31）年発布の高等女学校令により、女学校数が急速に増えた頃である。

女子教育の充実は、識字率をアップさせるとともに、彼女らの情報に対する欲求を生み出し、結果的に多くの女性雑誌が創刊されたと考えられる（表6-1）。高等女学校令では、良妻賢母教育が打ち出され、その徹底化が図られた。

また、日露戦争後の産業化進展に伴い、都会に人口が集中し、頭脳労働による俸給により生活する新中間層（いわゆる、ホワイトカラー）と呼ばれる階層が誕生したのもこの頃である。

一方、1898年施行の民法で制度化された一夫一婦制によって、家族は近代国家の基礎と位置づけられ、「家内領域」と「公共領域」の分化を生み出す。

婦人雑誌の始まりは、国家による男女性別役割分業体制への始まりでもあったのだ。

6-1-2 誌面の特徴

新中間層の妻たちは、この体制につき従うための、新しい生活知識を求めている。4章で述べたように、『家庭之友』の創刊が1903（明治36）年4月で、羽仁夫妻の長女誕生と重なったため、誌面はおのずと「自らの家庭が直面するさまざまな問題は、生きた教材と

表 6-1 明治時代における
女性雑誌創刊数と女学校生徒数¹⁾

西暦	明治	女学校数	女学校生徒数	創刊雑誌数
1894	27	14		1
1895	28			1
1896	29			3
1897	30			3
1898	31			2
1899	32			4
1900	33	52	11,984	4
1901	34			12
1902	35			7
1903	36			10
1904	37			9
1905	38	100	31,918	14
1906	39			12
1907	40			6
1908	41			4
1909	42			7
1910	43	193	56,239	5
1911	44			7
1912	45			5

なり、雑誌はその実験や発見を伝える場となった」²⁾。

とはいえ、とくに創刊当初、その大半は羽仁もと子や文化人による、啓蒙的文章が多かった。

羽仁もと子は、「夫は必ずその妻が、家に居て、自分を待っていることを信じて帰路につき、学校帰りの子供達も、おやつは母さまに貰はれるものと、あてにして帰れるといふ日本の家庭は幸福でございます。」³⁾と、夫や子どものために主婦が家事をすることを評価したうえで、そこから一步踏み出す必要性について、既に「家庭之友」創刊3年目に訴えている。すなわち、「家庭の進歩向上のために」は「主婦自身の修養」が必要であり、その方法として「読書と交際と、主婦に相応した公共的働き」を勧める。具体的には、「一、新聞雑誌と読書、二、主婦読書会、三、家庭的往来、四、公共的の働き」をあげている。

このうち「公共的の働き」とは、「貧しい出征軍人の家族を見舞う」ことや「孤児院その他の事業に金品を寄付する」という行為に及ぶことで、「生きた教訓を得、社会の有様を知ることができる」というものである。慰問や寄付は、後の社会活動と比較しても取るに足らない行為に思われるが、当時の女性にとって、社会は言うに及ばず、地域がどれほど遠いものであったかが理解できよう。

時代を下って1911（明治44）年頃、後に『婦女界』の編集長になる都河竜と、後に『主婦之友』を創刊する石川武美が羽仁のもとに身を寄せるが、編集方針の違いから二人とも去って行った。その理由を娘の羽仁説子は、二人は大衆向きの雑誌を作ったうえで啓蒙運動ができるというのに対し、羽仁吉一は大衆性が商業性にすりかえられるのを恐れたのだろう述べている⁴⁾。

読者は、特に大正期に入った頃から、「家内」の悩みのうち、夫の不品行に関する悩みを吐露し始める。羽仁もと子とその相談相手となる。例えば1919（大正8）年10月号の、「悩める友へ」⁵⁾は、読者の悩みに羽仁もと子が答えるというものであった。タイトル（括弧内は投稿者名）は以下のとおりである。

貞淑の名の下に（をみなへし）、先夫の愛を忘れかねて（春子）、何うしたら明るい生涯に（捨小舟）、妻ある人を慕ひて（露子）、愛想がつきる夫の品性（さつき）、不道德な職業の悪感化（ゆき子）、世間の義理か愛情か（野菊）

つまりこの時代の誌面は、前章でも明らかにしたように、家内を中心に扱いながらも、その進歩向上のため修養せよ、さらにその修養を哀れな人のために生かせという啓蒙的内容であり、かつ読者の悩みの引き受け先でもあったのだ。

6-1-3 読者組織化の試み

『婦人友友』誌では、すでに創刊年である1908（明治41）年の9月号で、「読者会開催」の予告をしている。テーマは「下婢について」で、会費は10銭とあり、翌月号にはその様子が載る。その内容は、10月10日に「読者会」を開催、当初申し込みの23名のうち20名が出席して行なわれたこと、今後も毎月10日に開催するというものであった。

実際に誌上に読者を取り込み、誌面構成の一翼を担わせることになったのは、1912（大正元）年、「研究部」が設置されたのが最初である。ここでは読者を対象に衣食住に関する実態調査を行い、理想的な中流家庭像を誌上で示している。これは、「家計報告」や「衣の持ち数調べ」などで、こんにちまで続いているものである⁶⁾。

第一次世界大戦の物価高騰を反映して、羽仁もと子が主婦の組織化の構想を発表したのは、1919（大正8）年1月であった。「最寄五十軒なり、百軒なりの主婦を会員とした、主婦の会」⁷⁾で、報酬などを取り決めたうえで、裁縫や娘の嫁入り支度や結婚記念日の手伝いをし合えば、収入につながる、共同して豚を飼ったり野菜作りをすれば不経済さが解消されるというものだが、この提案に対しては、読者からはあまり反応は得られなかった。

次に提案されたのは、1923（大正12）年の「読者組合」で、「6人ずつの組を作り、各組にリーダーを置き、読書会、講習会等を開くという提案にこたえて各地にたちまち122組合が成立した」⁸⁾という。この組合では、月々に会合を開き、子供の教育について話し合いをし、暇な人と忙しい人が仕事を交換し合う、また本部からは毎月3冊の有益な本が送られるということが決められていた。羽仁もと子は、すでにこの時代から、読者の組織化を試みていたのである。しかし、「1925（大正14）年の組合総会以降、読書会と不用品交換と手芸品展覧会が組合の恒例行事になった」⁹⁾とあることから、この会では積極的な社会活動は行なわれていなかったと思われる。

6-2 萌芽期（1927年-1941年）

6-2-1 『友の会』誕生

1927（昭和2）年、それまで書き溜めたものをまとめた『羽仁もと子著作集』（12巻）が刊行されると、これを記念して全国で講演会や裁縫を中心とした講習会を開催する。同年10月号巻頭で、羽仁もと子は「私共はお約束通り北海道から九州まで全国各地で講習会を開くことができた。それぞれの地方の熱心な読者の中にこれを機会にひとつの会を続けていきたいというところがいくつもでてきた。何と名をつけようかということが問題となり、『友の会』というのが一番よいと皆思った」¹⁰⁾と記す。これを機に、松本、大阪、岡山、奈良で『友の会』が誕生する。

読者組合は『友の会』と合流する。

当時の読者にとって『友の会』とは何だったのだろうか。『奈良友の会』創立の日の様子を、「かねがね各地方で友の会が出来たことを知り、ぜひ奈良の地にも、『婦人之友』の愛読者のほんとうによいお集まりがしたいと願っていました」としたうえで、世話人のひとり浜田が記録している¹¹⁾。

「娘時代には、書物もずいぶん読み、理想を持って結婚しながら、結婚後とかく、矛盾を感じたり、卑屈な気持ちに陥ったり、男子の生活の働き甲斐のあるのにひきかえ、婦人の生活の単調な毎日同じことを繰り返しているつまらなさを考えたりいたしました。が、一度婦人の使命のどんなに重く、貴いものかということを知ってからは、生まれ

かわったようにすべてのことが新しく、私に働きかけ、毎日の家庭生活の上にくらでも、頭と手を働かす事柄はあり、研究すべきことは数知れずあることに気づきました。私たちは友の会によりますます家庭生活を充実させていきたい」

「世の中は日に日に進歩していくのに自分は子どもにかかりきり、だんだん時勢におくれどうしようかと思っていたとき、今日の会に出席させていただき、ただただ神のひき合わせ」

「奈良の地に三年前から住みながら、お友だちがなくて淋しい淋しいと思いながら暮らしていましたが、今、友の会に入らせていただき、実にうれしい」

当時の受け手は、結婚や夫の転勤で知らない土地に入ったことで孤立し、単調な家事や育児、友達のいない淋しさを問題として抱えていた。『友の会』は、それらを解決してくれる希望に満ちあふれたものであったと考えられる。

6-2-2 誌面の特徴

前章の分析で示したとおり、この時代には国内外の社会情勢に関する記事が増えている。とくに昭和 10 年頃から、巻頭の羽仁もと子の記事に続いて 3～4 人の男性による記事が載る。1939（昭和 14）年 10 月号には、以下の記事が並ぶ。

国を思ふ心（馬場恒吾）、価格停止令の発動（小汀利得）、大雨と旱魃（岡田武松）、戦争と科学（隈部一雄）

各地に友の会ができ始めた 1927（昭和 2）年の翌年から、『婦人之友』誌には「友の会ニュース」が載るようになる。

1931（昭和 6）年 1 月号から始まった『愛読者列伝』は、「職業を持ちながら継子八人実子四人を育てる 岡山友の会 S 子」¹²⁾、「葡萄を作りつつ明るい明日の農村のために働く日に焼けた男爵夫人」¹³⁾など、各地の『友の会』の会員を紹介するシリーズとして、20 回に渡り連載された。

また、家内の悩みを切々と訴える記事の多かった前の時代と代わって、この時代の誌面には『婦人之友』によって頑強になった受け手の様子が紹介される。たとえば、1933（昭和 8）年 2 月号の「われら生活研究より」¹⁴⁾では以下のレポートが並ぶ。

①母親は男装の女侠客、自分は幼稚園で働く ②婦人之友の洋裁の記事で農漁村の娘たちを教へる ③害虫で全滅した盛岡林檎を復活させるまで ④瀬戸内海の小島に婦人之友精神を生活する唯一人の愛読者

6-2-3 『友の会』の事業

(1) 家庭生活合理化展覧会

1930（昭和 5）年の第 1 回全国友の会大会において「家庭生活合理化展覧会」を提案したのは、長岡友の会代表の桐淵であった。翌年から 2 年間にわたって外地（当時の樺太、朝鮮、台湾、満州）を含めた 60 カ所で展覧会が開催された。この展覧会は、この頃多く見

られた便利な器具の展覧会とは異なり、持ち物の少ない簡素な生活、時間と労力の節約、協力によって家庭では解決できない問題に取り組む、不用品交換会の奨励などであった。

長岡での開催準備に関して、桐淵は「会員の熱と力は日の迫るにしたがって加わり、のりバケツをさげてポスターを張り歩く者、ビラをかかえて宣伝に出かける者、今までこもりがちだった会員も自発的に個別訪問をして券を売るなど、よいと思うことのために誰もが勇敢になることができ、20 余人で 3000 余枚の前売りをすることができました」¹⁵⁾と印象を記している。

こうした展覧会は、『友の会』の周年記念などにおいて、こんにちまで不定期に開催されている。

(2) 東北セトルメント

1934（昭和 9）年と 1935（昭和 10）年、東北地方を冷害が襲う。羽仁もと子は『婦人之友』29 巻 2 月号に、「家族日本をつくりましようー東北の更生をたすけてー」と題した農村の合理化計画を載せる。これは、「物資による一時的な援助でなく、彼ら自身が現状に目ざめて自ら立ち上がるような救済活動」¹⁶⁾である。誌上で呼びかけた物資や浄財を携え、自由学園卒業生と『友の会』青年班が現地に赴く。その様子は計画が実施された数年間¹⁷⁾、毎号でレポートされている。

6-2-4 読者の取り込み

(1) 特定会員の登用

この頃の誌面を眺めると、いわゆる「常連」会員が頻繁に登場している。たとえば、人名・小林四枝に注目してみよう。この頃の『婦人之友』誌で現物を入手できた、1930（昭和 15）年、1 月号～3 月号、5 月号、9 月号、12 月号の全てに彼女の名前が見つけられるのである。

同 1 月号では、その前年の 11 月に全国主要都市で開催された「誰でも家持ち上手になるための愛読者会」の報告記事の中で、小林が講師として何度か話したことが載っている。他にも同様に、頻繁に登場する会員の名前見受けられることから、こうした登用は、この頃に始まったものと考えられる。彼女らには「小林さんのご主人は東京芝浦電気株式会社重役でいらっしゃいます」¹⁸⁾というように、夫の職業が載ることが多かった。夫の肩書きは政治家や大学教授、会社重役であり、そうした富裕層の妻で、かつ家事全般において長けた女性の生活技術を誌上で見せることで、新たな受け手を招きいれようとしていたと考えられる。

表 6-2 1940（昭和 15）年『婦人之友』誌における小林四枝の登用状況

掲載号	タイトル	参加者・取材対象者
1	「全国家持ち上手の主婦大座談会」	稲富いよの（熊本）、坂井志津枝（上田）、堀江いち（東京）、榎先晃野（広島）、佐藤華子（盛岡）、小山博子（東京）、桂ゆき（大阪）、中里史子（小田原）、桜井かほる（東京）、大塚道子（名古屋）、小林希美子（横浜）、篠遠よし枝（東京）、柿崎輝（長野）、 小林四枝 （東京）、羽仁もと子
2	新家事学校めぐり 2 「小林」家事学校訪問	小林四枝
3	誌上家計相談所 「露天商鯛焼屋さんの暮らしについて」	相談者：喜代子、回答者： 小林四枝
5	誌上家計相談所 「歯科医の生活を健全にするために」	相談者：大山あき子、回答者： 小林四枝
9	「紋つき座談会」	河崎なつ（文化学院教授）、ガントレット恒子（婦人矯風会副会頭）、 小林四枝 （友の会中央委員）、佐久千代子（櫻楓会理事）、中島福子（中島弥團次氏夫人）、平生すず（平生鈆三郎氏夫人）、松岡久子（友の会中央委員）、宮城たまよ（宮城長五郎氏夫人）
12	「家事下手、家計下手が上手になるための座談会」	羽仁もと子、落合うの、 小林四枝 、小山博子、芹川嘉久、千葉貞子、堀江いち、松岡久子、三堀光子 その他東京友の会有志 質問者数十名

(2)『友の会』の誌上への登場

先述の「家族日本をつくりましょー東北の更生をたすけてー」では、「この間の友の会レポートで、已にお耳に入れてあることですが、この誌上で今また改めて、東北六県の友の会にお願いします」や、「盛岡友の会青年部の吉田幾世さんが…」、「仙台友の会リーダー岡田礼子さんが…」など、あえて『友の会』に関する説明を加えていないばかりか、個人名さえも載る。すなわち、『友の会』を自明のものとしているのである。

『友の会』全国大会は、毎年 5 月に開催され、その直後発行号は 7 月号である。1940（昭和 15）年 7 月号では、『友の会』に関する記事が、羽仁もと子の巻頭文に続き、約 20 ページに渡って載るのである（図 6-1）。

創立者が同じであり、健在であるのだから当然のことではあるが、この時代は『友の会』に関することは『婦人之友』誌にごく自然に誌上に載った。



図 6-1 『婦人之友』1940（昭和15）年7月号目次

(3) 誌上販売戦略

愛読者形成のため、この頃、『主婦之友』と『婦人倶楽部』を中心に、付録による読者獲得合戦が展開されていた¹⁹⁾が、『婦人之友』はこれに参戦しない。『婦人之友』誌は、書店からの返本をなくし無駄を出さないという合理化の実践により、需要に応じて部数を刷り販売する予約販売制をとる。これによって安易に飛びつく受け手でなく、本当に読みたいという受け手のみを獲得していくのである。

誌上では、読者拡大が積極的に行われた。「新読者獲得運動の頁」という記事が掲載され始めたのが1934（昭和9）年、1940（昭和15）年2月号の「われらの読者拡大運動の頁」²⁰⁾の見出しに、以下の文章がある。

婦人之友に限られた階級、限られた人々のためでなく、万人のために役立つものでありたいといふ私どもの願ひが、昨年の友の会生活刷新相談所の運動などから、また一層実現されてきたわけで、本当にありがたいと思ひます。ますます婦人之友をひろくしたい一。間もなく卒業期が近づき、今年は殊に職業を持つ娘たちが多いことと思ひます。それらの中にも私たちの友を、沢山見出したいと思ひます。

そして、新読者220名とそれぞれの紹介者名、新読者23名と紹介友の会名が載っている。前の時代にこの雑誌が購入できたのは新中間層の妻たちであったが、ここに来て『婦人之友』は、階級に関係なく、若い女性を含めた多くの女性を読者として獲得しようとし始めている。そしてこれには、『友の会』も協力していたのである。

神間の分析²¹⁾によれば、明治期は主な読者の居住地は首都圏、大正にはいって全国的な広がりを見せるものの限定されていたが、昭和初期に都市圏ばかりでなく各地方に広がっ

たとしている。世帯主の職業も、昭和に入って工員や日雇いの妻からの投稿があることから、実際に読者層は拡大していたことがわかる。

1935（昭和 10）年には、「新 5 年計画読者倍化運動」も始まったようだが、目次で調べた限りでは 2 年ほどで立ち消えになっており、詳しいことはわからない。

6-2-5 地域と読者

この頃の読者投稿欄「おとずれ」に、島根県の読者から下記の投稿がある。

「友を求める」²²⁾

私は地方の中等教員の妻でまだ僅か三年の読者でございますが、貧しい生活を『婦人之友』を唯一の友としながら、精一杯営んでいる者でございます。しかし淋しいことには、この町は生活程度が低く、雑誌をとらうとするような方がすくないので、読み終わったのはなるべく知った方にお貸しするやうに努めてをりますが、まだ一緒に励み合ふお友達がございません。

この読者にとって、貧しい人を救う『婦人之友』誌には共感しても、身近にいる生活程度の低い人は、共に励む対象ではない。また、友人を求めるのに、わざわざ東京発の雑誌を経由して求めなくてはいけないということは、地方においては、まだ『婦人之友』読者は限られた階級生活者たちであり、『婦人之友』誌が、地域を飛び越えた拠り所であったことがわかる。

6-3 戦中（1942 年-1945 年）

6-3-1 時代背景

この時代、「衣を売って剣を買へ」²³⁾（1937（昭和 12）年 9 月号）、「家族日本の真面目」²⁴⁾（1937（昭和 12）年 10 月号）、「撃ちてし止まむ」²⁵⁾（1944（昭和 19）年 3 月号）等の記事において、羽仁もと子が戦争協力姿勢を示したことに關しては、既に多くの研究者が論じている²⁶⁾。こうした羽仁もと子の戦争協力に關しては、本論文では述べないこととする。

目次	羽仁もと子
戦下の夏・和歌	羽仁もと子
重大時局下の日本婦人	羽仁もと子
新食糧政策助言	羽仁もと子
新しい消費生活	羽仁もと子
主婦と防空活動	羽仁もと子
野良犬を捕らえた東北のおばさんたち	羽仁もと子
よい生活が築かれるまで	羽仁もと子
夏の小児の皮膚衛生	中村敏郎
家庭大工基礎篇・基礎篇	中村敏郎
夏の野菜を使つて	梅崎梅子
主婦の手で出来る背廣服の修理	梅崎梅子
病害蟲に勝ち抜け・津路町衛生會	梅崎梅子
食糧増産と學徒の使命を語る	梅崎梅子
空襲にそなへて	梅崎梅子
防空と照明	梅崎梅子
警報下の備食	梅崎梅子
夏と水	西川義方
軍衣帯で出来るリュックサック	西川義方
奉仕部會計報告	西川義方
生活講習會報告	西川義方
編輯室日記	西川義方
雑誌の発展	西川義方
表紙・裏表紙	西川義方
驚えないう都市	吉岡堅二
井口鼠を飼ひませう	田邊平介
日次カット	山口康春

図 6-2 『婦人之友』 1944（昭和 19）年 7 月号目次

6-3-2 誌面構成

『婦人之友』は、政府による雑誌の統合整理による廃刊²⁷⁾は免れたものの、「用紙4割減」²⁸⁾を指示される。誌面の縮小とともに発行部数も減ったため、1944(昭和19)年1月、「回読組合」を作らせ、読者に回覧を呼びかけている²⁹⁾。

この時代の内容は、物資不足克服のための工夫記事が多い。「配給うどんのおいしい食べ方」(1942(昭和17)年10月号)、「新しいものをひとつも買わずに揃へた赤坊一年間の衣類と新入学の支度一揃」(1943(昭和18)年5月号)、「家庭で隣組で簡単にできる炭焼き」(1944(昭和19)年2月号)などで、儉約や節約の工夫が伝えられたのである。

記事数が少ないながらも、羽仁もと子による記事は少なくとも毎号1~2記事は見受けられるが、『友の会』に関する記事はほとんど見つけることができない。しかし、主に東京周辺で開催の集まりへの勧誘コラムが、巻末に見受けられる。たとえば1944(昭和19)年1月号には、下記が載った。

会員募集 家庭食料増産方面常会開催

「空襲下生活」主婦学校会場増設

働く若い女性のための「日曜講座」新設—第一期計画・会員募集

また、『全国友の会70年のあゆみ』にも、東京在住の満喜は、「戦時下の生活には十人組主婦の生活指導隊に加えられて、各工場の主婦に家事家計のお話をしにまいりました」³⁰⁾と記していることから、時局にあっても、少なくとも東京近郊の『友の会』は、独自に活動していたことが察せられる。

6-3-3 『友の会』の活動

しかしながら、全国単位の活動はほとんど休止状態であったようだ。1943(昭和18)年の全国友の会大会開催については、『全国友の会小史』に、「交通困難のため中止。関東大会、関西大会がひらかれる」³¹⁾とある。1944(昭和19)年、1945(昭和20)年も中止、その間中央部は会員数を把握できていない。

1946(昭和21)年の全国友の会友の会大会は、4年ぶりの開催となった。この年度末(1947(昭和22)年)の会員数は5,205人で、戦中最後に掌握していた1942(昭和17)年の年度末の9,045人の6割にまで減少していた。

6-4 隆盛前期(1946年-1956年)

6-4-1 羽仁もと子の提案の事業化

(1) 引揚者救済事業

戦後最初の事業は、1946(昭和21)年から2年間に渡っておこなわれた「引上者救済」であった。これは、横須賀、名古屋、佐世保等で引揚者援護を行うというものである。佐世保友の会の西村は、「家庭人でしかない私どもは、まず驚きと不安、自信のなさで容易に決心がつきかねがた、友の会へかけられた信頼を思い、また『この大きな国の憂いを友の

会の心でくいとめてください』とまで頼まれると、ついに引き受けざるを得ない結果となった」³²⁾と、その心境を語っている。地方の友の会においては、突然の中央からの要請は初めてのことだったのかもしれない。ここでは「婦人相談所」を開設して、約2年間に渡り、引き揚げ女性の身体や生活の相談に応じた。

名古屋での様子は、1946（昭和21年）『婦人之友』4・5月号誌に載っている。「外地引き揚げ同胞のよき隣人となるために まず名古屋に愛読者生活相談所開かる」³³⁾では、「友の会としては当分船の入る度に、二人ずつここに出張して、まず愛読者の方を迎えること、そして落着き先の友の会をご紹介するとか、友の家の相談所をお知らせして、ゆつくりご相談に乗るとか、お友達としての結びつきをつくる機会としようといふことになった」、「婦人之友読者は一人が一人の手をとる気持ちで、常に引き上げ読者の方たちのよき隣人となること出来るように相互ひにつとめませう」とある。地方においては、引揚女性全般を救済対象としていたが、都会においては、愛読者が優先されたのである。

(2) 農閑期衣食住生活学校

1948（昭和23）年の全国大会において、羽仁もと子が「農村がよくならなければ日本はよくならない。将来を担う若い娘さんに働きかけたい。なるべく文化に恵まれない地方の」と言ったことがきっかけで、翌年2月、自由学園高等部女子学生70名を全国友の会20箇所の農村に派遣、地元の『友の会』会員と一緒に農村女性に衣食住の講習を行う「農閑期衣食住生活学校」を開催する。その報告記事は16ページにも及ぶ（図6-3）。



図 6-3 農閑期衣食住生活学校記事

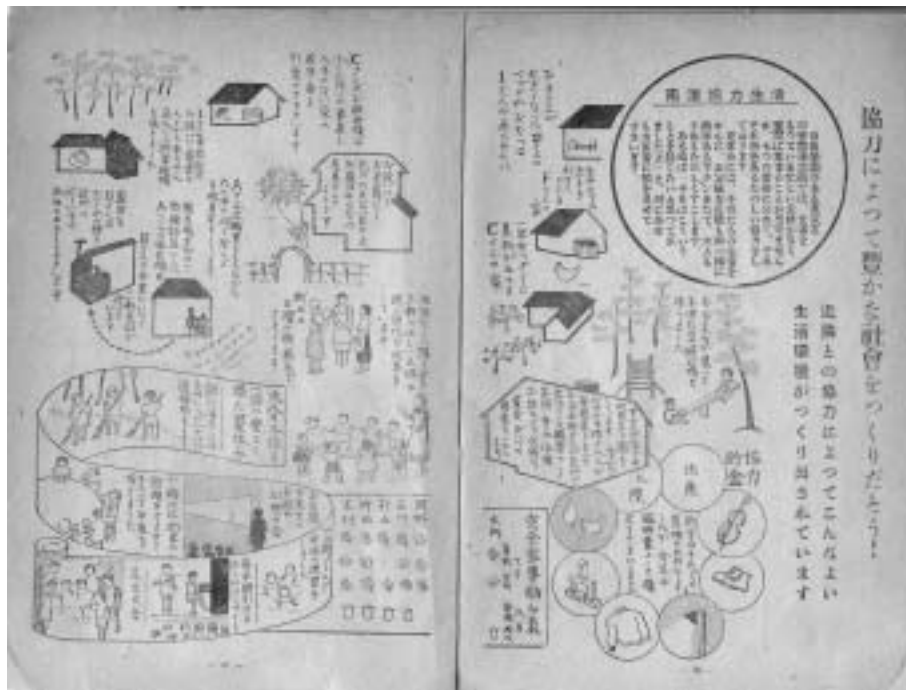


図 6-4 協力生活説明図（1950 年「われらの衣食住展覧会」図録より）

(3) 愛土生産運動

1954（昭和 29）年の全国大会では、「愛土生産」が提案される。これは、土を耕して生産をしようというもので、早速各地友の会では花や野菜作りが始まり、直後の夏期生活研究会で発表される。

(4) 協力事業

「グループ住宅」や「協力炊事」など、協力しあうことによって時間を節約し、そこから時間を作り出し、主婦を社会活動に参加させようとする構想も、徐々に誌上で示される。展覧会でも実際に行われている様子が示されている（図 6-4）。これは、近所づきあいではなく、方面会員同士のつながりである。

(5) 誌上グループ

『婦人之友』誌に現在も続いて掲載されている「乳幼児グループ」と「家計簿をつけ通す同盟」は、1946（昭和 21）年にできた。これら 2 つはいずれも『友の会』とは直接関係はない。「乳幼児グループ」は有料で、月 1 回婦人之友社から「乳幼児だより」が送られるほか、婦人之友社で月 1 回健康相談が受けられる。「家計簿をつけ通す同盟」は無料で、年に一度会報が送られる。家計簿記入のノウハウも教えてもらえるが、『家計簿をつけ通す同盟』は質問に対する回答の返信に時間がかかるけど、『友の会』に入会したら対面で教えてもらえるからと同盟入会がきっかけで『友の会』に来る人も多い³⁴⁾ soである。

6-4-2 誌面の特徴

(1)家計報告

家計簿関係の記事は、戦前のように、そのやりくりについて「相談」するのではなく、やりくりの成功の「報告記」に取って代わる。小林のような回答者がいない代わりに「評」、つまり批評が載る時期があるが、この批評者も『友の会』会員である。

主婦が薬局を経営する 薬剤師 5 人家族の家計 (大阪 藤田ゆき子) (評 千葉)³⁵⁾

主婦が七百坪の畠作り 諸学校教員 5 人家族の家計 (静岡 山野恵子) (評 堀江いち)³⁶⁾

(3)座談会

「萌芽期」に女性によってにぎやかに展開されていた座談会は少なくなり、出席者の多くは男性で、主に政治について語られることが多くなっている。会員と思われる女性たちは「主婦」で一括して載る。対話上でも名前は出てこないことが多い。

表 6-3 「隆盛前期」における「座談会」タイトルとその出席者

年・号	タイトル	出席者
1949 年 3 月号	中国を語る	内山完造、奥野信太郎、堀内干城、松方三郎、羽仁吉一、羽仁もと子、山室光子
1951 年 2 月号	天文の話、気象の話、教育の話	岡田武松、萩原雄祐、和達清夫、羽仁吉一、羽仁もと子
1951 年 5 月号	出産をめぐる研究会	広瀬興、松本清一、前田アヤ、母親 9 名
1953 年 7 月号	街はどうしたらきれいになるか	与謝野光、石川栄輝、浜口ミホ、主婦 10 名
1955 年 10 月号	青年期の心理	白井常 (心理学・東京女子大教授)、母親数名

(2)投稿

この時代に「投稿」が増えたのは、前章で示したとおりである。戦後 4 年目「主婦のいま一番問題にしていること」³⁷⁾を読むと、この時代の主婦の悩みが読み取れる。投書 6 編は以下であった。

洋裁の内職をする主婦の一日 (千葉 高橋いげ子)、教育費の悩み (福島 久子)、農村の主婦の問題 (山口県 伊於里)、特技のない私 (埼玉 大塚美保子)、実力のたりないこと (香川県 郁子)、鍵代わりの主婦 (東京 渡会芳子)

経済的な悩みや、自分の存在理由について悩む様子が伺える。

「投稿」の中でも特にこの時代に多かった「つきあい」は、下記のような内容である。「私の隣り」³⁸⁾では、主に社宅や官舎についての悩みの投書 6 編が載っている。タイトルは以下のとおり。

困いの中の町 (東京 一読者)、貧しい閑人 (香川 一織布工の妻)、煙の町で (福岡 K子)、山村のとなり (ヤエ子)、親切なおとなりをひかえて (松戸 ヨシ子)、主婦のつながり (東京 武子)

「私の住む町で感じること」³⁹⁾では、以下のタイトルが並ぶ。

新興宗教の波 (東京 新田たき)、村の運動会に (愛知 村田敬子)、おつなの権力 (熊本 きよ子)、日本でただひとつの夫人運動 (秋田 菊子)、基地の街に住んで (立川 山口晴子)

このように、近所つきあい、町や村のいいところ・悪いところの指摘などが主であった。ほかには病苦や結婚・再婚の話も多いが、自分の住む町を客観的に評価した上述の投稿のほかにも、下記に示す「わたくしの勉強していることしたいこと」⁴⁰⁾の内容を見ると、読者が次第に社会へ目を向け始めたということがわかる。

平和への一步 (東京 H子)、通信教育の道を (仙台 寺島笑子)、大病ののち聴覚を失つて (三重 静子)、息子たちにまけずに (水戸 今井キヨ)、遺伝学に興味をもつて (奈良 M子)、小さな努力 (仙台 原竹野)、薬剤師として (大阪 田中富士子)、私の片隅の勉強 (愛媛 Y子)、作歌を学びつつ (東京 和子)

(3)「献立全国版」

この時代、『友の会』による企画が記事になったのは、1950 (昭和 25) 年の「献立全国版」である。全国の『友の会』から、毎号 4 つの『友の会』による、地域色の出た献立が載る。

(4)研究会の誌上登場

1953 (昭和 28) 年 9 月号に、『友の会』の「夏期生活研究会」⁴¹⁾の発表の内容が昭和 28 年 9 月号に載る。このうち、「4 年間続いている協力食事」は、4 軒・総数 15 名の食事のうち週 4 回夕食の副食を担当することで、調理時間が短縮され献立に変化ができたという内容である。

毎年 7 月下旬のおこなわれる『友の会』の「生活研究会」記事は、この前後の年代は「友の会だより」に概要が載るのみである。こうした記事となったのは、この年だけであった。

6-4-3 読者の取り込み

この時代は、「萌芽期」のように読者獲得に躍起になっている様子はみられない。ただ、1953 (昭和 28) 年は、婦人之友社建業 50 周年であり、それを記念した「読者拡大運動」が展開されている。読者拡大のための「紹介カード」が挟み込まれ、運動参加者の名前が 1~2 ページにわたって掲載された。



図 6-4 新読者紹介カード

6-5 隆盛後期 (1957 年-1982 年)

6-5-1 時代背景と新規事業

1957 (昭和 32) 年 4 月、羽仁もと子が死亡する。

1960 年、わが国では所得倍増計画が策定され、その後約 10 年間、日本経済は飛躍的に成長した高度経済成長期である。一方で、大量生産の裏返しとしてのゴミ問題など公害の

問題が深刻化、都市への人口集中による過密問題と過疎問題が発生したのもこの時代である。

『友の会』では、1959（昭和 34）年に「全国一斉時間調べ」が行なわれる。これは全会員の 1 週間の時間の使い方を集計するもので、この後 5 年おきに現在まで行なわれている。

6-5-2 誌面の特徴

(1)政治・経済記事の増加

1950 年代にはあまり見られなかった海外の政情に関する記事が毎号に載るようになったのは、1960 年代にはいつてからである。1960（昭和 35）年 11 月号に「近づく米大統領選挙」、座談会「ひとりの選挙民として」、1962（昭和 37）年 7 月号で「全面軍縮と私たち」、座談会「政治の理想と現実と」など、政治に関する記事が毎号に 2～3 記事ほど現れる。

視点が社会に向くようになって、「環境」への視点も見受けられるようになってくる。1962（昭和 37）年 7 月号の「水の生活科学」、翌 8 月号の「生きるゴミ・死ぬゴミ」等である。

(2)疑問回答

戦後 10 年で飛躍的に増えたのは、衣食住における How to 記事であった。その様子は、およそ 5 年ごとの該当記事数を比較した表 6-4 から明らかである。

表 6-4 1940 年代から 1970 年代の衣食住 How to 記事量比較表

年・号	該当タイトル	該当記事数
1949 年 10 月号	少女の秋の服装、工夫に富んだ家庭料理、私はこうして家の整理をしました	3
1959 年 10 月号	すまいと照明、家の修理と改築、簡単でおいしい中国料理、秋から冬にかけての里いも料理、秋冬のコレクション、赤ちゃんのあみもの、ドレッシーなツーピース、主婦のためのブラウス、秋のバッグいろいろ	9
1964 年 11 月号	室内装飾のために、新しい暖房、冬の装いに、ニットドレス、ドイツのお母さんの作った動物、既製服を上手に着るには、目で見える料理の基礎「包む・まるめる」、鯖を使った 5 日分の献立、電気釜で出来るフルーツケーキ、	9
1970 年 10 月号	寒い地方の暖房を考える、鍋のしまい方、家庭でできる染めかえ、10 月の家事「外まわり」、イタリア料理、基礎料理「さつま芋」、家庭の生産で賑やかな食卓、我が家自慢のパン、ミディ丈のスーツの試み、よそゆきのアンサンブル、合の一揃いより、秋の手編み、男の子のジャンパー	13

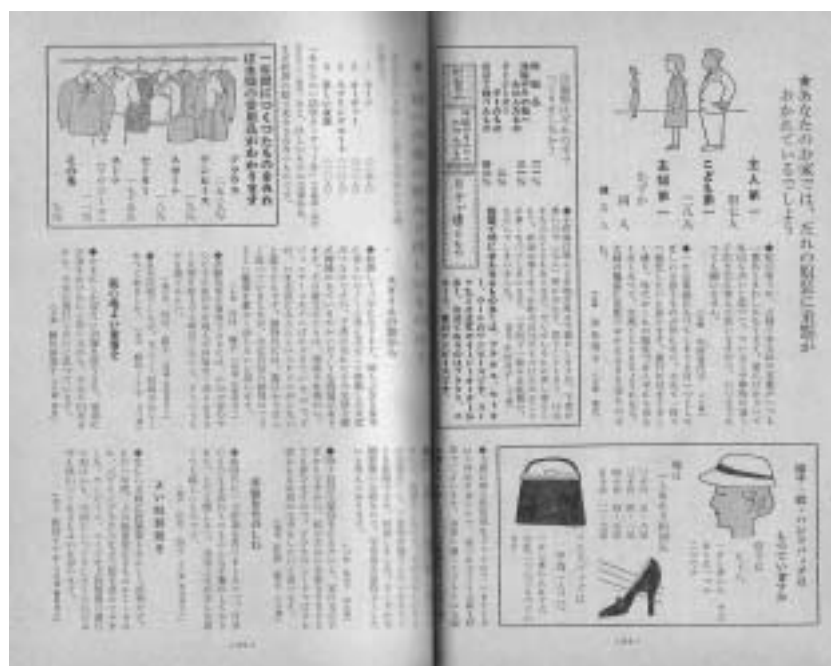


図 6-5 1956（昭和 31）年 11 月号「主婦と服装」記事

(3)調査結果記事

昭和 30 年代に入ると、読者対象の調査を行ない、その集計結果を載せる特集記事が載ることが増える。調査対象者は、1956（昭和 31 年）11 月号「主婦と服装」⁴²⁾（図 6-5）では「愛読者 94 名」であり、1956（昭和 31）年 9 月号「私の食事日記」⁴³⁾は「日本各地の愛読者を中心とする 130 名の方に記入していただいたもの」の抜粋、1964（昭和 39）年 6 月号「スポーツは家庭から」⁴⁴⁾は、「全国 146 家庭の主婦」の回答である。

これらのうち、1972（昭和 47）年 11 月号「家庭から社会へ」では、読者 155 人を対象に所属しているボランティア活動が問われている（表 6-5）。各世代の思いは、以下のとおり。

「能力、資格を活かしたい」・「復職したい」（20 代後半）、「老人問題で役に立ちたい」・「社会福祉的なボランティア活動をしたい」（30 代前半）、「恵まれない老人のため」（30 代後半）、「お年寄りの世話や話し相手をする機関に入って慰められたら幸福だと思う」（40 代前半）

つまりこの頃の『婦人之友』誌読者（『友の会』会員以外もいる）のまわりに、こんにちのような地域ベースのボランティア組織はほとんどなく、やれるとしたら老人関係のボランティアをやりたいという人が多いことがわかる。また、『友の会』や PTA、婦人会

表 6-5 所属しているボランティア活動
（『婦人之友』1972（昭和 47）年 11 月号より）

年齢層	26-29	30-34	35-39	40-44	45-50	計
友の会	5	19	10	18	4	56
PTA		3	6	5		14
婦人の会	1	3	1	1		6
教会関係		1	2	2		5
地域教育		3		1	1	5
消費者運動		3		1		4
その他	1		2	2	1	6
計	7	32	21	30	6	96

もボランティア活動であるという認識が興味深い。

なお、この記事の後には、「力をあわせ たゆまず続く 大阪・団地の主婦たちのボランティア活動」の記事があり、送り手の、こうした活動機運を盛り上げる様子が伺える。

(4)座談会

この時代の座談会では、前の時代と比較して、とくに結婚の話題を主とした「つきあい」や、「文化」にかかわるものが多くなっている。

「健全で着実な結婚観」(1958年10月号)

「結婚にふみくらせるものはなにか」(1969年10月号)

「流儀をもって暮らそう」(1968年10月号)

「音楽の歓び 山荘に語る」(1962年10月号)

「詩と人生をめぐる 英詩人ブランデン夫妻を囲む夕」(1963年10月号)

「今日の絵画 今日の画家 インタビュー」(1959年10月号)

6-5-3 『友の会』との関係

(1)「主婦の衣服戸棚」

1963(昭和38)年の1年間「主婦の衣服戸棚」という連載が載るが、これは東京友の会衣服グループによるものである。「主婦として一番活動的な時期である、ちょうど小学生のお子さんのある三十代の主婦で、都会に暮らす例を取り上げて」衣服をどれだけ持てばいいかを検討していこうというもので、この1年間、東京友の会会員が実例として載った。

(2)個別研究

衣食住のHow to記事に刺激されてか、会員も各家庭で研究や実験を行い、それを発表する機会が多くあった。

中でも堀志津は、「洗淨理論の専門家たちに『洗濯の神様』と呼ばれ」⁴⁵⁾、婦人之友社から『たのしい洗濯』(1958年初版)など実用書も出版したほどである。

岡村は、同じく1960年代に3人の育ち盛りの子どもを抱え、東京友の会の示す目安量と金額にあわせるため、毎日の買い物の際、金額とともにそれぞれの食材の重さもこまめに記録していった⁴⁶⁾。その4年にも及ぶ蓄積データは、『友の会』では貴重なものとして、目安量から食費予算を考える資料として使われた。

こうした特定の会員による、秀でた研究活動やその成果は、『婦人之友』誌で紹介された。

「洗濯・漂白・糊つけ・まわり吹きの正しい分量 堀志津」(1955(昭和30)年10月号)

「ワイシャツを真っ白に上手に洗濯するには」(1958(昭和33)年5月号)

「じゅうたんの手入れは？堀志津さんにきく」(1964(昭和39)年10月号)

「1年間にわが家では、なにをどれだけ食べたでしょう？たのしい発見 岡村恭子」(1965(昭和40)年11月号)

(3) 会員執筆記事

この時代に、特定の主婦を取り上げてライフスタイルや生い立ちを紹介する記事があり、最後の方まで読んで初めて紹介されている人物が実は『友の会』会員であるということがわかる記事が載る。たとえば1965（昭和40）年2月号の「冬ごもりたのし 軽井沢高原に住む野口さんの家事」⁴⁷⁾は、最終に初めて彼女が「小諸友の会軽井沢最寄」のメンバーであることがわかるのである。

この時代に限らず、いわゆる「特派員」や「派遣記者」として、『友の会』会員やその家族が文章を書くことは多いという。たとえば藤浪みや子は自由学園出身ということもあるが、結婚後京都に住んだことで、関西圏で取材が必要な記事を、依頼によって40余り書いている⁴⁸⁾。Mさんも、「地球市民の夢に生きたわが子」（1993（平成5）年8月号）に関して、「あの記事は、婦人之友社から大阪友の会に依頼がありました。亡くなられた中田さんが生活団の卒業生であり、そのお母さんもかつて大阪友の会会員であったことを婦人之友社が聞かれて（どこから聞かれたかは分かりませんが）、大阪友の会の人たちが中田さんのお家を訪問して、その記事を書いてくれというご依頼でした。（中略）記事は私が書きました。婦人之友社の依頼で各地の友の会がその地区の「頼まれた所」を訪問して記事を書くということは、よくあることでした。私も2回書きました」⁴⁹⁾という。

6-6 転換前期（1973年-1982年）

6-6-1 時代背景と事業展開

低成長時代に入り、ページ数は1973年をピークに減少し始めた。

この年は、婦人之友社建業70周年でもあった。これを記念して『明日の友』を発刊する。これは、高齢者向けの季刊誌で後に隔月発刊となり、現在も続いている。医学や健康を中心に中高年の生活にそくした内容になっている⁵⁰⁾。

6-6-2 誌面の特徴

(1) 公害と環境

前の時代にわずかに掲載されることがあった「環境」に関する記事が、ここに来て本格的に展開されるようになる。1973（昭和48）年に「新しい家政学の出発“適量”の研究」の連載が載り、以降も「公害」と「環境」に関する記事が、適宜掲載される。

(2) 座談会

座談会では、「高校教師は語る」（1974年10月号）、「教育は人間の発見から」（1977年10月号）、「平和をつくる日常の教育」（1979年1月号）など「学校」に関する話題や、「もてなしのこころ」（1980年10月号）、「結婚に何をともめるのか」（1982年10月号）など「つきあい」に関する話題に加えて、この時代最後の方で「平和をもたらす“知恵”を語る」（1981年1月号）、「平

和を求めて 難民・飢え・そしていのち」(1982年4月号)といった、海外の平和問題に関する話題が増えてくる。

6-6-3 読者の取り込み

この時代は『婦人之友』誌上で目立った事業展開はなかった。

『友の会』では1981(昭和56)年が創立50周年ということで、家事家計講習会⁵¹⁾などで力を入れた結果、会員数がついに3万人を突破する。

6-7 転換後期(1983年-2005年)

6-7-1 時代背景と事業展開

(1) バングラディッシュとの台所交流

1984(昭和59)年2月、バングラディッシュ訪問を終えた会員で栄養士でもある小林好美子が、バングラディッシュの子どもの栄養状態の悪さを婦人之友社で話す機会があり、翌年、栄養豊富な大豆とその料理法を持ち込もうという「バングラディッシュとの交流」が具体化した。その後2002(平成14)年まではほぼ毎年、『友の会』会員と婦人之友社から数名の訪問団が組織されバングラディッシュに送られる。交流のための資金は『友の会』による募金によって賄われた。交流は大豆にとどまらず、パジャマ縫製の指導をして製品を日本で売ることもあった。やがて現地から「大豆は臭い」、「虫がついて、他の作物にまで影響を及ぼす」など問題が噴出、交流が終わる。2003(平成15)年からは新たに有志による勉強会が発足し、今後のかかわり方などを検討しているところである。

なお、「バングラディッシュとの交流」については、婦人之友社が2冊の本にまとめ出版している^{52)、53)}が、交流が終わったあとの勉強会の発足等について、『婦人之友』誌上に詳細な記事を見つけることはできない。



図 6-6 『女性たちの台所の交流』表紙

(2) 環境配慮の取り組み

各地『友の会』において、環境配慮活動は主な活動となっていてところが多い。たとえば近畿部では、1998(平成10)年からCO₂排出量調べを行なっているし、広島友の会では『友の会』と婦人之友社が共同開発した鍋帽子⁵⁴⁾の普及に努めている。



図 6-7 鍋帽子

6-7-2 誌面の特徴

(1) 羽仁もと子と『友の会』の後退

羽仁もと子の著作集からの抜き出し記事「友への手紙」は、1985（昭和 60）年から 1993（平成 5）年まで、グラビアに次ぐトップに掲載されるが、1994 年以降「座談会」に次ぐ 2 番目に、2001 年と翌年には 3 番目に後退してしまう。

また、『婦人之友』は知っていて、『友の会』は知らないという読者を意識してか、この時代にはいって、『友の会』に関する説明が比較的大きく載ることがある。たとえば、1999（平成 11）年 10 月号「技術をもって信頼に応える」⁵⁵⁾ は、大阪友の会と豊中友の会の「友愛リサイクル」に関する記事であるが、「約 40 年前、ひとりの友の会会員（婦人之友読者の集まり）の言葉から、家庭に眠っている衣服を活用して身近もすっきりさせようという働きが始まりました。」という括弧内説明付きの文章で始まっている。2000（平成 12）年 10 月号の『『起きなさい』ではなく『何時です』といましよう』⁵⁶⁾ は、西宮友の会幼児生活団指導者による記事であるが、幼児生活団の様子を描いたこの記事の下に、「幼児生活団とは…」という書き出しで 1/3 ページのコラムとしてその説明が載るのである。

(2) 環境配慮活動に関する記事

環境に関する記事は、1990（平成 2）年の年間特集として「環境を守るのは私たち」が、そして 1996（平成 8）年は「新シンプルライフ考」が、1999（平成 11）年からは「不必要な“進歩”にブレーキを」という連載が始まり、現在まで絶えることはない。

環境問題とともに、食の安全に関する記事もシリーズ化される。1993 年の「識菜会レポート」、翌 1994 年の「安全を食べたい」などである。

これらは、『友の会』における環境配慮活動に、拍車をかけたであろう。

6-7-3 編集方針の変化

(1) 『生活読本』の発行

1997 年 5 月から毎年 1 回全 5 冊、『生活読本』という若い夫婦向けの隔年誌を発行する。いわゆる「anan サイズ」と呼ばれる変 A4 型で⁵⁷⁾、全ページ 2 色刷りあるいはフルカラー印刷である。ヒヤリングでは、「オレンジページを意識してる」、「高齢者向けの『明日の友』は成功した。季刊から隔月発刊に移行もできた。

『生活読本』は若年層をつかむことできなかった、「これが出たとき『友社も随分変わったねえ』と言いつつあった。でも書くことがなくなってやめたんでしょう」という声が聞かれた。

(2) 表紙の変化

2003 年、創刊 100 年に伴って表紙が一新されている。



図 6-8 『生活読本』
2001（平成 13）年 5 月号表紙

それまでの絵画風表紙画が、バックを白にして、イラストレーターによると思われる抽象的かつ斬新な絵柄に変わっていて、明らかに若い読者層を意識したものである。ヒヤリングでは、「今までは内部で作っていたものを、外注に出すようになったらしい」という声がきかれた。



図 6-9 『婦人之友』2004 年 6 月号表紙

(3) 友の会データ利用の縮小

以前のように『友の会』で何か大きな活動成果があっても、それを詳細に載せることがなくなった。

たとえば、「時間調べ」は、『友の会』が 5 年に 1 度行なう大きな集計事業であるが、掲載量が次第に減少するとともに、参考データという扱いで載るようになってきている。

表 6-6 『婦人之友』誌上での『友の会』生活調べデータ掲載状況

掲載号	ページ数	タイトル	内容
1985 年 1 月号	14	生き方—主婦は選択する—家庭と社会の結びつきを求めて	集計概要 (2p)、個人レポート 3 件 (6p)、横浜友の会レポート 1 件 (2p)、コラム 1 件 (3p)
1990 年 4 月号	36	主婦の生活時間調査—全国友の会 2 万人の参加による	集計概要 (5p)、2 色刷りグラフ (折込 1 枚)、白黒写真+レポート (8p)、藤沢友の会レポート (3p)、個人レポート 2 件 (4p)
1995 年 1 月号	29	座談会「永遠の中のいま」 朝一日のスタートを気持ちよく・全国友の会「2 万人の生活時間調べ」	座談会 (12p)、個人レポート 3 件・友の会レポート 2 件 (13p)、集計概要 (4p)
2000 年	※雑誌未入手のため確認不可		
2005 年 1 月号	35	「大切な時間」有意義に心遊ばせながら	特集 (全 35p) 中のうち、「生活時間調べ」データが載るのは、最後の「ふえつつける子どもとの時間」(6p) についてのみ

(4) 「家族みんなの生活学校」から「生活デザイン研究室」へ

創刊 100 周年の 2003 年からトップ記事は「家族みんなの生活学校」という特集記事になる。これは比較的若い読者（男性、子どもも可）が生徒になって生活技術を誌上で学ぶというものである。2006 年からは「生活デザイン研究室」に変わる。1 月号では若い家族の家の中の写真を載せ「センスのよい生き方、さわやかな暮らし方。」⁵⁸⁾を提案している。



図 6-10 『婦人之友』 2005（昭和 17）年 1 月号「ふえつづける子どもと時間」記事

(5) 特約店の発足

1930 年から続けられていた予約販売制度は、余分な部数を刷ることなく、合理的に愛読者だけに届けるという意図があった。1978（昭和 53）年巻頭でも「いま出版界で、月々夥しい返本が、資源の浪費に拍車をかけている中で、本誌は、面倒をいとわぬ多くの読者の「予約販売」に強くささえられてきた」と、自らこの販売方法を評価しているが、2006（平成 18）年 2 月号で、「婦人之友社の雑誌・書籍のある書店」として、全国の主要な書店を特約店として契約したことを告げている。

6-8 まとめ

本章では、雑誌のほか、ヒヤリング調査や他の文献調査結果も加えて、特に、前章で明らかになった各時代の特徴を反映させる①羽仁もと子の先導力、②戦争直前の戦争に関すること、『友の会』による環境や不条理に関する活動、③羽仁もと子の存在 3 点に着目しながら、送り手と受け手の関係性の変遷を眺めてきた。

以下にその結果をまとめる。

(1) 友の会以前

羽仁もと子は、創刊直後から、読者に「修養」として、読書や公共的な働きを勧めていたが、このうち、公共的な働きとは、貧しい人への慰問や寄付行為である。

『友の会』ができる以前の、創刊直後から読者を集めて「読者会」や「読者組合」を結成するなど、新しいことを試みていた。また、悩みの聞き役も務めている。

次の時代の『友の会』が次々生まれる様子から、こうした試みによって、既に読者の共同体意識を作りつつあったと想像できる。

(2)「萌芽期」

『友の会』ができたことで、会員は家の外での活動に関する記事を書く。羽仁もと子の提案した、「家庭生活合理化展」や「東北セトルメント」も、社会に目を向けるきっかけとなったであろう。

一方で、羽仁もと子や男性執筆者による国内外情勢に関しては、読者の反応は誌上に現れなかった。関心の大半はまだ家の中のことであったようだ。家事や家計を上手にこなす東京に住む富裕層の妻が、その理想像として誌上に頻繁に現れる。

(3)「戦中」

羽仁もと子の戦争協力が声高に語られるが、『友の会』を含む読者の、反発はもちろん同調の様子も、誌面には現れていない。全国大会の開催はなかったが、この頃東京近郊で開催されていた『友の会』主催の講習会の内容から、実際に活動があったことと、時局を乗り切るための工夫を学びあっていたことが想像できる。

(4)「隆盛前期」

羽仁もと子の提案する事業が、最も多く、活発に行われていた時代である。この時代において最も社会的な活動といえるのは「引揚者救済」であるが、佐世保ではその公共性が認められるが、名古屋の事例では、『友の会』内部優先の事業であった。「グループ住宅」、「共同炊事」も『友の会』内への提案であった。

座談会では、男性が入ると政治的な話題が多い。読者を含めた女性による座談の話題は、家内一辺倒だった戦前とは異なり、少し社会的な内容になっている。

会員は、戦前のように『友の会』が前面に出ることはないが、執筆者として、あるいは取材される側として、ごく自然に誌上に登場しはじめる。

また、この時代にはいって読者の投稿が増えたことにより、当時の読者が何を考えていたかもわかる。戦前に比べて、地域への問題意識や、自分の生き方を意識するようになってきている。

(5)「隆盛後期」

羽仁もと子の死亡で新たな事業が提案されなくなる。政治や経済の記事が増加するが、読者にとっては実感のなかったことだったのだろう。これに反応したと思われる記事はなく、読者の関心は衣食住記事であったようだ。

座談会で語られることは、文化や結婚のことが多い。

また、この時代の終わりである 1972（昭和 47）年のボランティアの調査記事から、『友

の会』はボランティア活動であるという認識と、専業主婦の地域社会でのボランティア活動が一般的でないことがわかる。

誌上と共に、『友の会』の活動においても、大きな動きが認められなかったのは、羽仁もと子の影響力がなくなったのと、高度経済成長という時代背景が影響しているのであろう。

(6) 「転換前期」

「公害」と「環境」の記事が増えてきたことで、前の時代の停滞ムードから脱する。また、座談会では平和問題が語られる。これらによって、読者の視線がさらに社会に向けられたことが想像できる。

この時代も、『友の会』における目立った活動は行なわれないが、会員が順調に増えたことは、誌上に載らない定例的な講習会や展覧会が順調に行われていたことの現われであろう。

(7) 「転換後期」

前章で示した散布図は前の時代とほとんど変わっていなかったが、誌面は分析に現れないところで大きな変化を見せている。羽仁もと子が後退し、『友の会』の活動がそのまま載ることはなく、一部が紹介される程度である。誌面はカラフルになり、若い女性を意識したものになってきている。

『友の会』では、環境配慮に関する独自の取り組みが目立つようになってきている。『友の会』の会員減少という現状は、『婦人之友』誌からは全く見えてこない。

以上、時代背景や、『婦人之友』誌とともに、他の文献とヒヤリング調査の結果も交えて、送り手と受け手の関係性の変遷を眺めてきた。

次章でここまでの分析内容をまとめ、結論づける。

【注釈・引用】

1) 学制百年史

http://www.mext.go.jp/hakusyo/book/hpbz198101/hpbz198101_2_060.html, 2006-1-31

2) 婦人之友社：婦人之友社建業 100 周年記念 読者と歩んだ一世紀展, p13, 婦人之友社 (2003)

3) 婦人之友社：羽仁もと子著作集 思想しつつ生活しつつ(上)第 2 巻, pp113-117 (1927)

4) 斉藤道子：羽仁もと子—生涯と思想, p116, ドメス出版 (1988)

5) 婦人之友社：婦人之友, 17 巻, 10 月号, pp49~79 (1919)

6) 斉藤道子：前掲書, pp68-69 (1988)

7) 婦人之友社：羽仁もと子著作集 家事家計編 9 巻, pp287-303 (1927)

- 8) 全国友の会：70 周年記念全国友の会小史，全国友の会，p4（2000）
- 9) 齊藤道子：前掲書，p170，ドメス出版（1988）
- 10) 全国友の会：全国友の会 70 周年の歩み，全国友の会，p2（2003）
- 11) 全国友の会：全国友の会 70 周年の歩み，全国友の会，pp5-8（2003）
- 12) 婦人之友社：前掲書，25 巻，1 月号（1931）
- 13) 婦人之友社：前掲書，25 巻，7 月号（1931）
- 14) 婦人之友社：前掲書，27 巻，2 月号，pp90-96（1933）
- 15) 全国友の会：全国友の会 70 年の歩み，全国友の会，p17（2003）
- 16) 全国友の会：全国友の会 70 年の歩み，全国友の会，p213（2000）
- 17) 齊藤道子：前掲書，ドメス出版，p227（1988）に、「当初の 5 ヵ年の実施予定を早めに打ち切り、1938 年頃から『友の会』が 4 ヶ所に設置され自主的に活動を始めた」ことが記されている。
- 18) 婦人之友社：前掲書，34 巻，2 月号，p90（1940）
- 19) 岡満男：婦人雑誌ジャーナリズム，現代ジャーナリズム出版会，pp119-132（1981）
- 20) 婦人之友社：前掲書，34 巻，2 月号，pp216-217（1940）
- 21) 神間稔子・小川正光：『婦人之友』の家計記事による読者層の属性に関する検討，愛知教育大学家政学教室研究紀要，第 20 号，pp53-62（1989）
- 22) 婦人之友社：前掲書，34 巻，2 月号，p223（1940）
- 23) 婦人之友社：前掲書，31 巻，9 月号，pp33-43（1937）
- 24) 婦人之友社：前掲書，31 巻，10 月号，pp33-57（1937）
- 25) 婦人之友社：前掲書，38 巻，3 月号，pp2-3（1944）
- 26) たとえば岡は前掲書において、「熱心なキリスト者で、自由主義・合理主義者であったはずの彼女だが、戦争遂行のためには矛盾ともみえるファナチックな態度をうかがわせている」、「狂信性をくわえた天皇崇拝の姿勢が、戦争遂行にたいしてもファナチックにさせたのだろう」と述べているし、齊藤美奈子は『モダンガール』（文春文庫 p197（2003））の中で、「戦争は変化を求めている人々の気持ちをパッと明るくした。保守的で頑迷な昔風の女性ではなく、前向きで活発で近代的なセンスをもった女性ほど、戦争にハマりやすい」とシニカルに批判している。
- 27) 岡満男：前掲書，p164，現代ジャーナリズム出版会（1981）に、「『中央公論社の 80 年』の年表によると、80 誌をかぞえた婦人雑誌を 17 誌に統合とあるが、『主婦の友社の 50 年』によると「50 数種も合った家庭婦人関係の雑誌は 15 種に統合された」とある。また 1941（昭和 16）年 8 月 24 日の『朝日新聞』夕刊は、16 種に統合と報じており、それぞれ数字がことなり、実情をはっきりとつかむことはできないが…」とある。
- 28) 羽仁もと子：羽仁もと子著作集 第 20 巻 自由・協力・愛，p225，婦人之友社（1963）
- 29) 婦人之友社：前掲書，39 巻，1 月号，p12（1944）に、「婦人之友回読組合一年の報告と今年の出発」の記事が載っている。

- 30) 全国友の会：前掲書，p21（2000）
- 31) 全国友の会：70 周年記念全国友の会小史，p21，全国友の会（2000）
- 32) 全国友の会：全国友の会 70 年の歩み，pp228-229（2000）
- 33) 婦人之友社：前掲書，40 巻，4・5 月号，pp37-39（1946）
- 34) M さん，2006-1-5，私信
- 35) 婦人之友社：前掲書，50 巻，6 月号，pp88-91（1956）
- 36) 婦人之友社：前掲書，50 巻，9 月号，pp100-103
- 37) 婦人之友社：前掲書，43 巻，10 月号，pp55-60（1949）
- 38) 婦人之友社：前掲書，47 巻，7 月号，pp48-53（1953）
- 39) 婦人之友社：前掲書，49 巻，10 月号，pp88-90（1955）
- 40) 婦人之友社：前掲書，47 巻，9 月号，pp68-74（1953）
- 41) 婦人之友社：前掲書，47 巻，9 月号，pp47-54（1953）
- 42) 婦人之友社：前掲書，50 巻，11 月号，pp50-56（1956）
- 43) 婦人之友社：前掲書，50 巻，9 月号，pp34-48（1956）
- 44) 婦人之友社：前掲書，58 巻，6 月号，pp32-49（1964）
- 45) 婦人之友社：前掲書，p55（2003）
- 46) 全国友の会：全国友の会 70 周年の歩み，全国友の会，pp62-66（2003）
- 47) 婦人之友社：前掲書，59 巻，2 月号，pp62-70（1965）
- 48) 藤浪みや子：土の器 み旨のままに，エディット・パルク（2002）にまとめて、出版もしている。
- 49) M さん，2005-11-5，私信
- 50) ヒヤリングで、高齢者は『婦人之友』と『明日の友』両方を読んでいるという人が多いことがわかっている。また、「脂っこくない料理とか、年金をふまえた家計とか。比較的若い人が読んでも面白い」内容だそうだ。（M さん，2006-1-5，私信）
- 51) 1979（昭和 54）年全国 662 ヶ所開催・69,300 人入場に比べ、1980（昭和 50）年には、全国 745 ヶ所開催・73,400 人入場している。
- 52) 婦人之友編集部：大豆を通して ベンガルの女性たちと友だちになれた，婦人之友社（1990）
- 53) 婦人之友編集部：大豆料理から広がった女性たちの台所の交流，婦人之友社（1998）
- 54) 加熱沸騰直後の鍋にする綿入れカバー。たとえば茹で大豆沸騰後この帽子を 10 分かぶせることで、1 時間の加熱が不要になる。
- 55) 婦人之友社：前掲書，93 巻，11 月号，p51（1999）
- 56) 婦人之友社：前掲書，94 巻，10 月号，pp117-121（2000）
- 57) 最終発刊の 2001 年 5 月増刊号のみ A5 版であった。
- 58) 婦人之友社：前掲書，100 巻，1 月号，p30（2006）